

「モノ作り」について

日本電気硝子株式会社 社長

森 哲次

モノ作りについて常々考えていることがあります。人類文明の黎明期である石器時代は、人間が自然をありのままに利用していた時代でした。自然にできた洞窟に住み、草木の実を採り、魚を捕って暮らしていました。やがて自然の法則を理解し、これを活用するようになって農業が始まりました。自然の単純利用から、自然の法則を利用する段階へ進んだわけです。

エネルギーの利用も石炭から石油、天然ガス、原子力へと進化し、乗り物でいえば、自転車から自動車、飛行機、ジェット機のように、人間は時代とともに技術を発展させてきました。しかし、これらの技術を人間が創り出したと考えるなら、それは大きな勘違いではないでしょうか。人間は自然に存在する法則を利用しているに過ぎません。人間とは無関係につねに存在してきた自然の法則への理解が深まるにつれて、その利用の仕方が発展してきただけだといえるでしょう。

われわれガラスの製造にかかわっている者は、ガラス組成の決定、原料の調合、溶解、成形、加工という工程を相手に日夜取り組んでいます。これも一つの自然を相手にしているようなものです。これらの作業を自然の法則に照らして謙虚に考えてみると、実に多くの問題が自然法則を深く理解しないままに放置されていることに愕然とします。もちろん、自然法則の理解とは科学のことだと言いかえてもよいのですが、技術の向上にとって必要な科学は、まずは常識的レベルのものを徹底的に深く考えることだと思います。

電球・ブラウン管・光ファイバーなどを構成するガラスは、二十世紀文明にとって大きな貢献をしてきました。将来、二十一世紀の文明に必要なニューガラスも次々と登場することでしょう。しかし「モノ作り」の技術の向上がなければ、ニューガラスどころではなく、「モノ作り」の技術が向上すれば、それがそのままニューガラスを支える基礎にもなる。このような心境で仕事に取り組んでいきたいと考えています。